

# 第1章 高エネルギーパートの将来について

文責: 矢島 和希 (大阪大学理学研究科)

## 1.1 現状

原子核三者若手夏の学校において、昨年度、今年度の高エネルギーパート参加人数の減少が著しい。2013年度の参加者は33名であったが、昨年度の2014年度は口頭発表者が4名(全参加者数不明)、今年度は参加者14名(内口頭発表7名)と、円滑な運営に支障を来すほどの人数しか参加していない。<sup>1</sup>

このような状況では、次年度への引継ぎも困難である。事実、今年度の参加者の所属校は、阪大6名、名大5名、総研大2名、東邦大1名であり、阪大は高エネルギーパート準備校、名大は講師の所属校である。このような偏った参加者の状況では、参加者の中で次年度への引継ぎを行うことは難しい。

また、2014年度から2015年度への引継ぎは、所属校は違えど、共同で実験を行っているグループ内で行われた。これは健全な引継ぎだといえるであろうか？

これらを踏まえ、次年度以降の高エネルギーパートのあり方について議論をお願いしたい。

## 1.2 問題点

以下に挙げる問題点は、過去の参加者からの者ではなく、今年度高エネルギーパート準備校のメンバーから出た意見をまとめたものである。

### 1.2.1 参加者不足

一度参加者数が落ち込んでしまうと、参加するメリットが減ってしまう。特に昨年度の人件減少で、参加者の上下のつながりが途絶えている。今年度の準備校においても昨年度の夏の学校参加者はいない。

---

<sup>1</sup>話はずれるが、過去の参加者数などの情報が少なく、傾向の把握が困難である。事務局校で各パート校の参加人数の統計はとっているのだろうか。無ければ連続的な記録を取るべきではないだろうか。

## 1.2.2 他の研究会の存在

高エネルギー分野の学生が多数参加する、他の研究会がいくつか存在する。特に『高エネルギー春の学校』は、6月開催と時期も近く、参加者も非常に多いため、夏の学校と競合する。

## 1.2.3 知名度不足

そもそも高エネルギー分野の学生に知られていない。過去、参加人数が少なかったため、先輩からの情報を得られない。また YONUPA-ML への登録数も少ないのではないかと(未検証)。

## 1.2.4 他パートとの関連性、原子核パートにおける問題

他パートが理論中心であるため、実験分野である高エネルギーパートの参加意義が薄い。原子核実験分野は、高エネルギー分野との親和性が高いが、原子核パートでは、近年ほとんどの参加者が理論分野からである。

## 1.2.5 過去に指摘された運営上の問題

過去にも高エネルギーパートから以下のような指摘が行われている。<sup>2</sup> これらの多くは、現在も改善されていないと感じたので全文を引用する。

### 各パート校との連携について

**ML** 他パートの情報がほとんど流れなかった。進捗状況などはお互いに報告しあうのが基本。また、[sansha-ctr@yukawa.kyoto-u.ac.jp](mailto:sansha-ctr@yukawa.kyoto-u.ac.jp) などは、うまく活用されていない。ML で投げたものに対してレスがないなど、責任がはっきりしていない。知っている人、意見がある人がレスをしたりするのは当たり前。スケジュールなど、不透明な部分が多すぎ。個人宛のメールが多い? [yonupa-ml@yukawa.kyoto-u.ac.jp](mailto:yonupa-ml@yukawa.kyoto-u.ac.jp) に認められるまで、3ヶ月以上かかった。管理を担当しているところは何をしているのか。ML ごとの範囲がわかりにくい。もっと統一してもいい気がする。この辺りに関しても、担当校同志の連携が薄いのがよくわかる。もっと、連携とった方がいいんじゃない?

**HP** 三者のページ更新に関する情報は、少なくともパート担当校の人間には連絡しましょう。いつ、どこで変わったかが、こちらも把握できない。結構重要な情報を載せていると思うんだけど。

---

<sup>2</sup>[http://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~sansha.wakate/document/2006c\\_gian.pdf](http://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~sansha.wakate/document/2006c_gian.pdf)

## 募集方法について

**パート校への連絡** 準備校が参加者を集めていたが、それではパートにどれくらいの人数が集まるのか、どの大学からは来ているのかなどの情報がなかなかパート校に伝わらない。連絡を密にするのもひとつだが、パート校に募集を任せるのがよいと思う。特に宣伝方法に関しては、各パート校のほうがより詳しい。パート校で人数を把握して、それを準備校に渡すというのがひとつの方法かと。

**宣伝方法について** 高エネルギーパートでは夏の学校を知っていた人がほとんどいなかった。これはもちろんこれまでのパート校にも責任があるが、例えば、yonupa-mlを知っていた人などいなかった。パート校に任せつつも、準備校やセンター校は、人数が減っていくことを単に放っておいただけではないか？ 三者の意味がこの辺りでも薄れている感じがする。

## 1.3 案1:休止

次年度の高エネルギーパートの参加を見送る。高エネルギーパートの休止は2005年度にも提案されており、この時の参加人数も11名と、今年度とほぼ同じである。現在の高エネルギーパート参加規模を鑑みて、実情に即した案だと考える。今年度高エネルギーパート準備校としては、この案を推進する。

## 1.4 案2:継続

高エネルギーパートを継続するのならば、上で取りあげた問題を全て解決すべきである。次年度の高エネルギーパート準備校の負担はかなり大きくなると思われるので、他の役職校の協力をお願いしたい。

今年度高エネ準備校としては、現状の問題点を解決するために以下の解決策を提案する。

### 参加者不足

各研究室から最低1名の参加を半強制する。これは、高エネルギーパートの人数が安定するまでの一時的な措置である。

## 他の研究会の存在、知名度不足

高エネルギー分野の教員との話し合いを行い、協力を得る。他の研究会の日程調整に参加する。知名度を高めるため、教員や高エネルギー研究者会議のメンバーを活用し、YONUPA-ML への加入数をもっと増やすべきである。

## 他パートとの関連性

原子核パートでは、原子核実験からの参加者を増やすための行動を是非お願いしたい。理論分野においても、現象論などの実験と親和性のある領域と高エネルギーパートの合同セッションを設けることができないだろうか。

## 1.5 FAQ

### 1.5.1 2005 年度の休止案のその後は

教員によって構成される高エネルギー委員会と呼ばれる会議において、継続が望まれ、その後、東大 ICEPP の学生有志による運営で 2006 年度の開催へと至った。<sup>3</sup>

### 1.5.2 継続の場合の次年度への引継ぎは

高エネルギーパートの次年度引継ぎ校は未定である。高エネルギー分野の場合、研究室間のつながりは、同じ大学内より、同じ実験グループ内の方が強いことも多いので、実験グループ全体で準備校となってもらえることも可能ではないか。

### 1.5.3 参加の半強制は問題ないか

教員が主催する研究会では良くある事である。それと、あくまでも一時的な措置であることを強調しておく。

---

<sup>3</sup>[http://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~sansha.wakate/document/2006b\\_gian.pdf](http://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~sansha.wakate/document/2006b_gian.pdf)